

仮面ライダーアマゾンイオタ

Kurokoda i

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは……歴史から消されたアマゾンのもう一つの物語  
漆黒の体を持ち、自分の中の正義を信じて戦う少年の記憶

目次

エピソード0	1
エピソード1	3

aegis

## エピソード0

### アマゾン細胞

それは日本最大の製薬企業『野座間製薬』によって作られた物名前では細胞とついているが実際は細胞では無く、ウイルスサイズの人工生命体である

そこから培養し、人間ほどの大きさにしたのが『アマゾン』であるこの生命体は本能的に動物性タンパク質を摂ることのできない力を扱うことができる

しかし、そのタンパク質は普通の牛、豚、鳥等の肉では無く、力を発揮することが出来る程のタンパク質を持つのは人間

そう、アマゾン……いや、アマゾン細胞は別名『人喰い細胞』とも言う

その為、野座間製薬はその人食を抑えるために期限はあるものの、特殊な薬物を含んだ腕輪、『アマゾンレジスター』を培養したアマゾンたちにつけていた

その腕輪の薬物により、底がつくまで理性を保ったままでもいられたそんな中、一人の研究者が一匹のアマゾンを使って改造を行っていた

場所は野座間製薬の地下極秘研究部屋

ここはその人物以外は入ることが許されない特別な部屋であったその中で一匹のアマゾンは巨大な培養槽の中で静かに眠っていた眠っているアマゾンのイメージカラーは藍黒色、腹は白で、足は鳥の趾、背中には小さいながらも翼を持ち、頭は恐ろしさと同時に何かから守ってくれそうな雰囲気を出していた

そのアマゾンは『ツバメアマゾン』

ツバメは昔から米などを食い荒らす害虫を食べ、さらにその家の壁に巣を作るとその家に住む人は縁起が良くなるなど人々から有難い存在でもある鳥類

そんな幸福の存在であるツバメが人間を食らう怪物の一匹になっ

ていた

そんなツバメアマゾンを改造しているのは一人の女性『水稻未来』若くして、IQ600という驚異の知能を持っていた

そして彼女はこのツバメアマゾンの管理を任されていた

そんな彼女は今、ツバメアマゾンを培養槽に入れて、ある部分の改造を行っていた

それは『人食衝動の除去』であった

彼女は他に生み出されたアマゾン等を「穢れた生命」と言つて憎悪を出しているのだが、このアマゾンだけは何故かそんな感情を出さずに逆に愛情を与えていた

そして彼女は、アマゾンの持つ『人食衝動』を取り除く為に、長い時間改造していた

そしてついに……

未来「ついに完成した……私の愛しき人が……」

そんな感想を述べながら、人食では無くなったアマゾンを眺めていた

ツバメアマゾンも培養槽の中で静かに眠りから覚めようとしていた

しかし……それから5日後、野座間製菓の不祥事によつて4000匹ものアマゾンが外に解き放たれてしまった

ここから、アマゾンによる悲劇が起きてしまう事は今は誰も知らなかった

また、その中に不人食のツバメアマゾンも紛れて脱走してしまった  
その行方は誰も知らない……

## エピソード1 a e g i s

アマゾンが外の放たれて3年の歳月が過ぎた  
今となつては3000匹のアマゾンが駆除されてしまい、この世に  
は1000匹の実験体しかいなくなつてしまった  
ツバメアマゾンもその中の一匹として、今も生き続けていた



ここはとある森の中。

その中をフラつきながら、森の中を歩き続ける異形の存在。

それは『ツバメアマゾン』。

彼は実験体の中で生き残りの一体となっていた。

しかし、彼は他のアマゾンと共に行動をしていなかった。

いや……行動したくなかったのだ………

彼は只のアマゾンではなく、人食をしないアマゾンであった為、偶然共に行動してしまつた他のアマゾン達による人食に恐怖を覚えてしまい、それ以来単独行動をしていた。

そして森の中で、腹が減つたならアマゾンであれば絶対に食べる筈のない『野草』や『虫』を食べて、今まで生きていた。

人食が無くなつたその体は、人間と同じ食べ物を食す事で、普通に生きてこられた。

しかし、彼は4C（特定有害生物対策センター）に討伐対象になつているため、発見されては攻撃を受けていた。

普通なら同じく攻撃すればいいのだが、彼は闘いを望まない心優しい性格であつた為、攻撃を受けながら逃げていた。

ツバメ『ハア……ハア……』ドサツ

そのツケが回ってきたのか、彼はそのまま倒れ込んでしまった。

既に彼の体は、疲労が溜まっていたのだ。

(自分は何をしたのだろうか……自分はただ……自由の身になりたかった……)……他のアマゾンのように、人間を貪り喰いたいのでは無く、人間のように生きていきただけなのに……(涙)

自分の望んでいた夢は実現することなく、彼は悍ましい怪人の姿から幼い感じを残した少年の姿になった

その瞬間、天気が雨に変わり、経つにつれてかなりの大雨となった。

それは、彼のツバメアマゾン悲しさを表現しているみたいに

(ああ……人間として生きていきたくったなあ……(涙))

そんな思いを残して、そのまま瞼を閉じて意識を闇へ……



ツバメアマゾンが少年の姿に化け、死んだかの様に眠っている間に、一人の人間が彼の元にやってきた

純白ワンピースを着て、白いハイヒールを履き、髪は美しい黒色のロングヘアであった

その人物は、ツバメアマゾンの管理をし、そのアマゾンの食人衝動の除去をしていた『水稻未来』であった

彼女は、その少年の正体を知っていたのか、満面な笑顔で倒れている少年を見つめていた

未来「見つけたわ、私の愛しき人」



ツバメ「うっ……うーん……」

ツバメアマゾンは不思議な体感でその瞳を開けた

目が覚めると、先ほどまで森にいたはずであったが、周りには白い机、白い棚、白いカーテン等の何もかも白で統一された部屋にいた

ツバメ「ここは……どこなの？」

ツバメアマゾンは今までいた筈の森とは違う場所に戸惑い出しました

そんな状況の中、奥にある一つの扉が開き始めた

そこから現れたのは、黒いロングヘアをした美しい女性であった

未来「あら♪目覚めたのね」

女性の声にビビってしまうツバメアマゾン

例え、人を食べなくても今まで人間にされてきた行為にトラウマを持つていた様だ

だが女性は、近づいて怯えているツバメアマゾンを優しく抱きしめた

ツバメ「!？」

未来「大丈夫よ。ここなら、あなたを傷つける穢い奴はいないわよ」

ツバメ「……ホント？」

未来「ええ、ほんとよ。私は水稲未来。貴方のお嫁さんよ」

ツバメ「えっ?」

その言葉が出た瞬間、未来は少年に化けたツバメアマゾンの唇に自分の唇を重ねた

ツバメアマゾンは驚いていたが、初めてで何か優しい感じをして、そのまま未来のなすがままにされた

ツバメ「あっ、あの／＼／＼」

未来「大丈夫よ、何も恐れることはないわ♡」



それは、夜までも行われ、二人はいつしか愛の営みをしていた  
そこから、漆黒の体を持ちながら、人を守る戦士が生まれようとし  
ていた